

# 鶏卵相場

## —長期と短期、2つの卵価から見えてくるもの—

北海道大学 大学院農学研究院 研究員 大森 隆

現在、全国の採卵用成鶏羽数はおよそ1億3千万羽、生産される鶏卵の量は年間250万トンである。

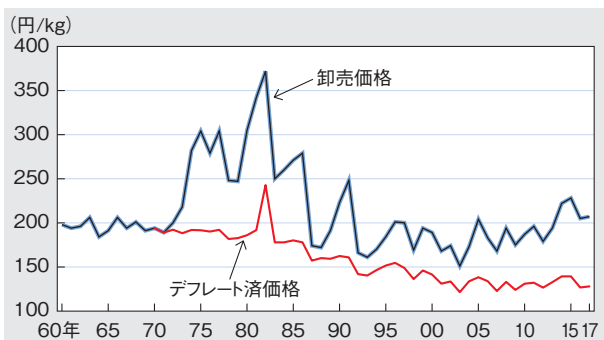
鶏卵の生産量は1980年代に200万トンを上回り、1992年には259万7千トンと最高値を記録し、以降は毎年240~250万トンとその生産は安定している。

しかも、卵価は長らく「物価の優等生」と言われ、安定しているように見える。しかし、卵価の安定性とは裏腹に、生産現場ではこの間大きな変化が起こり、卵価をめぐる生産調整の在り方がその変化を加速した。また、卵価の季節変動は、長期的な変動とは別に同一サイクルを繰り返している。ここでは卵価の長期と短期の動向から、変化の側面と安住の側面について考えてみたい。

### 1 物価の優等生としての卵価の長期趨勢とその要因

第1図は長期的な卵価の動向を示したものである。

第1図 鶏卵価格の推移(1960~2017年)



資料 全農資料により作成

(注) 1 卸売価格は全農東京Mサイズ。

2 デフレートは消費者物価指数。

1970年代後半からの10年間を除き卵価は安定しており、1955年時点で1kg当たり205円であったものが、2017年でも207円である。もちろん、これは名目値であり、1970年を100とする卵の消費者物価指数で実質化すると、2017年の卵価は128円となる。およそ半額になっているのである。

この中長期的な卵価の相場には、飼料原料となる輸入トウモロコシの豊凶、自然災害や高温などによる生産量の減少、国内外での鳥インフルエンザ発生などの生産リスクの影響、これを受けた生産者の増羽→相場価格の下落といったサイクル(うねり)が存在する。また、生産費の50%を占める餌は輸入穀物に依存しているため為替レート変動の影響を受けやすい。

さらに、国は養鶏産業安定化のための政策を打ち出しているが、その一環として羽数制限を実施してきた。しかし、この政策はいびつな養鶏業界を創り出した原因となっており、小規模養鶏農家、養鶏団地を廃業に追い込み、大型養鶏場をマンモス養鶏場に導いたといえる。大手の羽数枠破りが横行し、増羽への転換が可能であったのも資金力のある大手商社系企業養鶏だったからである。<sup>(注)</sup>生産調整は有名無実となって2004年に廃止された。

その間、生産者は、病気に強い多産系の鶏種導入を行い、ウィンドレス鶏舎や、GPセンサーなど施設・設備の開発や規模の拡大を図るなど経営改善に取り組んできたことも事実である。これらの努力の結果が第1図に示したように「物価の優等生」を実現し、日本の農産物としては珍しく非常に高い自給率を維

持してきたのである。

## 2 ノコギリ型のエッグサイクルと建値

鶏卵は多くのスーパーで特売の目玉になる人気食料品である。近年はいわゆる特殊卵やスーパーのPB商品といった固定価格での取引も増加しているが、鶏卵流通の基軸価格は依然として鶏卵相場に依存している。

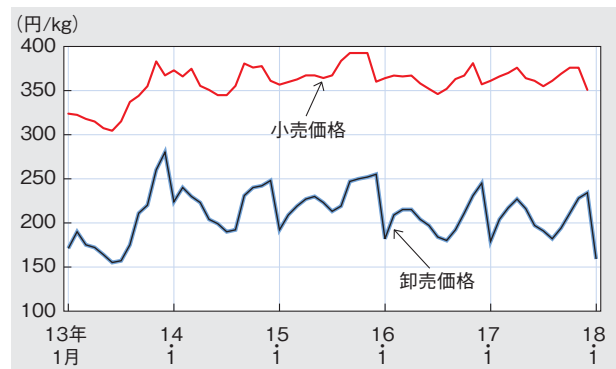
鶏卵の卸売価格(鶏卵相場価格)は、JA全農たまごをはじめとする農協系と商社系の荷受会社が毎日の需給動向などをもとに毎朝9時に地域別に決定され、新聞紙上で発表される。北から北海道(ホクレン相場)、東京、名古屋、大阪、福岡(以上JA全農たまご相場)の5地区の相場である。これによって各地の生産者がその日に出荷する鶏卵の販売価格が決まる仕組みになっている。

年間の鶏卵相場は、気温が高くなり需要が減退する夏場に価格は下降気味になり、気温が低下し需要が増加する冬場に価格が上昇する傾向を繰り返している(第2図)。

この図をよく見ると卸売価格の季節変動に際立った特徴があることに気付かされる。それは年を区切る縦線にかかる急斜面のことである。2017年歳末から18年正月の全農東京相場Mサイズを見ると、年末の235円に対して、18年の年明け相場は150円である。この価格は異常価格であるため補てん金(経営安定対策)が発動される。実に85円もの下落で、年平均価格に戻るには毎年20日ほどかかっている。

このノコギリ歯のように規則性を持つ波形ができる原因は日本の正月慣習にある。1980年代前半まで正月三が日は、商店をはじめ百貨店、スーパーマーケットなど、店という店

第2図 鶏卵価格の推移(2013年1月~18年1月)



資料 日本養鶏協会資料による

はほとんど休業したものである。

このため、年末、年始の休みのない鶏が生んだ卵は正月4日頃までは、問屋を中心に生産者も一時在庫を抱え、これが原因で市場がジャブジャブ(業界用語で余剰卵が出ること)になり、毎年正月明け相場は価格が大幅に下落し農家はため息をついていた。

この現象は、正月習慣が変わる前までは毎年繰り返されていたが、近年は百貨店や大型スーパーなどは大晦日も元旦も休まず営業するようになっている。実際、Iスーパーマーケットでは、「大晦日は需要が増大するので計画発注制を設けている、価格は通常通り。31日、1日は休まず営業」(バイヤーY氏聞き取り調査)であり、大型スーパーは横並びである。であるから当時と状況は異なっている。

それにもかかわらず、年末年始の相場価格は毎年1月5日に発表される年初相場価格(正月明け相場という)が、前年の12月最終営業日(通常では26日か27日、年末止め相場という)以降に出荷される商品まで遡及して適用されるという特殊な慣習が続いている。ノコギリの歯型はこれが要因なのである。

時代が変わっても、依然として繰り返されるこの現象(相場)を解析するにはどのような方程式を用いればいいのか、どなたかご教授いただければと思う。

(おおもり たかし)

(注)大森隆「北海道における採卵養鶏業の企業化と系統農協機能の変化に関する研究」『北海道大学大学院農学研究院邦文紀要』2017、p.22